

第28回現地研究会見聞記

— 十勝の肉牛施設を見学して —

宮田保彦

(北海道農試畜産部)

とかく狭い専門分野に閉じ籠りがちな試験場に勤務する者にとって、北海道家畜管理研究会の現地研究会に参加することは、北海道の畜産を肌で感じる機会を与えられるとともに、日常接する機会の少ない、農業物理・施設機械・農業経営の研究者・技術者の方々とも同一の牛舎なり家畜なりを通して語り合うことができる格好の場である。これらの意味において家畜管理研究会は非常に有意義な研究会として毎回参加することを楽しみにしている次第です。第27回現地研究会は昭和55年9月21・22日の両日にわたり、主としてデイリー・ビーフの施設見学ということで十勝の地で開催された。

日勝峠を越えると眼下には広々とした畑作地帯が広がる。ここが日本随一の畑作酪農地帯「十勝国」である。ビートや豆類の畑の中に点々とサイロが見受けられるが、周囲の風景とよく調和しており、少しも異和感がない。酪農がすっかり定着している証拠だ、などと思っているうちに中心都市帯広についた。帯広からさらに東へ25km行くと、今回の現地研究会の集合地池田町に着く。その人口一万二千余の池田町を見下す小高い丘に町営「まきばの家」があり、総会および懇親会が行われ、盛会のうちに終了した。懇親会ではローゼワインと町民還元用ワインとビーフに一同満足舌鼓を打った。野外でやや寒かったが眼下の街の灯がとても印象的であった。

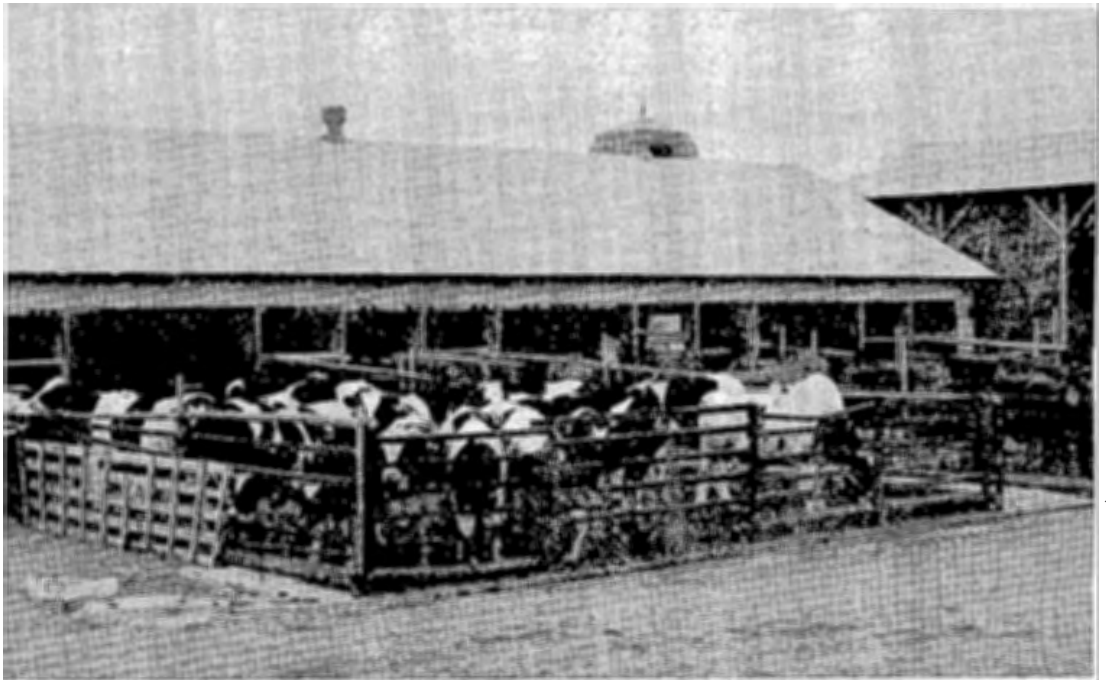
一夜明けて9月22日の朝、ややうす曇りの天候ではあったが、一行はバスと自家用車で見学地へ向け出発した。

乳牛のおす子牛を肥育する技術は牛肉需要の増大とともに省資源的観点からも注目されており、今後、北海道畜産の一つの柱となるものと考えられる。最近消費者は赤肉志向の傾向が強くなり、ホルスタイン種の肉用牛としての価値が高まりつつあるが、ホルスタインおす子牛の肉生産技術は、我国では歴史も浅く、格付評価も低くみられがちなことや、おりからの新生子牛の価格不安定など問題点が多い。とくに、技術的観点からの最も重要な問題点は子牛の損耗防止技術であろう。ホクレン大町技師によると北海道で年間生産されるホルスタインおす子牛は18万頭で、うち2万7千頭が子牛のままに殺されるが、残りの15～16万頭が哺育・育成されるにもかかわらず出荷時には11～12万頭になっているという。その差3万～3万5千頭が損耗と考えられ、その大部分は哺育中の疾病・事故であり、その損害は30億円にのぼるということであった。これは牛舎の換気不良による呼吸器病、不衛生、低温多湿によるサルモネラ菌による下痢、牛舎の設計ミスによる骨折等の事故などの複合効果によるといわれている。現時点でフィールドではどのような工夫がなされているのか、省力が省略にとって替ってはいないか、一般に所得効率が低いといわれている肉牛経営における設備投資と労働性とのバランスはどうか、最近アメリカ方面よりとり入れられたカーフ・ハッチはどの程度普及しているのか……など期待を抱いて現地を目指した。

○池田町肥育センター

町が町民の農業所得の増大を図って建設した町営肥育試験施設で地元の人々は「百頭牛舎」と呼んでいる。池田町職員の池下さんの熱意ある説明に一行は耳を傾けた。これは昭和47年に一棟、48年にもう一棟完成した百頭収容の肥育牛舎で一面開放式のスラットスローア式ルーズバーン方式をとっている。一人で省力的に管理ができるように設計しており、現実一人で運営しているとのことであった。また、スラットの巾は3.5 cmが良好であるなど実際的な試験も行っていた。ホルスタイン去勢牛のほかアーディン・アングス種と褐毛和種とそれらの一代雑種も肥育している。この一代雑種は被毛が赤かったり黒かったり、無角だったり有角だったりする様であり、牛の品種の不確立さについて考えさせられた。また、この一代雑種は発育が良好で赤肉が多いということであった。ホルスタイン去勢牛と褐毛和種ではホルスタイン去勢牛の方が増体が良好だそうでホルスタイン去勢牛の肉利用について心強い知見を得た。これらの肥育牛は池田町の厳寒期の寒冷環境（ -12°C ～ -13°C ）では肥育効率や増体にはほとんど影響されない。また、池田町では、野草地放牧を主体とした褐毛和種牛の育成試験を行っており良好な成績を得ている。褐毛和種の放牧適性を考慮して選んだそうだが、ワインカラーに統一するなどなかなか心憎いと思う。

放牧を主体とした育成と省力的な肥育技術とがよく調和しているのが、この池田町の畜産であった。



池田町営肥育センター「百頭牛舎」
手前がホル雄、向う側が褐毛和種

○更別アシタカ農事有限会社

組合員の合意で設立された有限会社でホルスタイン去勢牛の肥育素牛生産を行っている。240頭収容のフリーストール式哺育・育成舎と追い込み式の育成舎が主要な施設である。ほかに完成間近のコ

リNZ方式肥育舎を肉用牛集約生産基地育成事業により建築中で、それが2棟ある。先々は一貫経営を行って効率を高めるそうだ。

このフリーストール牛舎は従来、疾病・事故が多かったが、一見して暗く、湿潤で、換気が悪いことがわかる。特に哺育牛は幼なくして環境が変わるうえ、集団哺育されるので十分に衛生管理に気を配らなければならない。当初、240頭分のストールを高い密度で供用したそうで、環境不良とストレスで呼吸器系伝染病が多発したのであろう。呼吸器系伝染病の場合、常に集団で発生するので被害が大きく、ウイルスが病原体である場合、治療が困難なので、防疫に万全を期するほかはない。その点完成間近のコリNZ方式（カウンタースロープ・フィーディングフロア方式）牛舎は、牛にとっても余裕があり、管理者にとっても手が掛らず、採光・換気・衛生面に重点が置かれており、人間工学と「牛工学」の一致点として高く評されるべきであろう。ただ、難をいうと坪あたり8万円といわれる設備投資額である。同じ十勝管内のT農協のコリNZ方式牛舎は坪あたり30万円かかったそうで、ホルスタイン種の肉牛利用は省資源的技術であるだけに、ちょっと異和感を感じざるを得ない。これらの牛舎も数年後の経営成績で厳格な評価を受けるであろう。

○片岡牧場

片岡さんは昭和47年にこの土地に入植して、2年間搾乳牛を飼養し、その後ホルスタイン去勢牛と和牛に切り換え肉牛生産に情熱を傾けている。その言葉の端々に自信のほどが伺われた。現在ホルスタイン去勢牛400頭と和牛64頭を哺育一育成一肥育の一貫体系で飼育しており、その経営はすっかり軌道にのった感じだ。片岡さんの自信に満ちた説明に学ぶべきところが多かった。以下片岡牧場の概況を述べる。

① デントコーンサイレージの活用

育成・肥育期飼料にデントコーンサイレージを4カ月齢より給与を開始しふんだんに使う。これは完全な自給飼料であり肥育効率の上昇につながる。このことは肉牛飼料自給率が34%と低い日本畜産の土地資源有効活用例として注目される。

② オールイン・オールアウト方式

牛舎はオールイン・オールアウト方式で利用し、連続使用はしない。このことは衛生管理面で最も重要なポイントであると思われる。冬は屋内、夏は屋外で子牛を交互に飼養するように心がけることも衛生的に良好な結果をもたらしている。

③ 開放式コリNZ方式牛舎

コリNZ方式牛舎の利点は前に述べたが、ここでは手作りで坪あたり5千9百円の建築費で建てたとのことである。すでに牛も入っており元気な姿を見せていた。

④ カーフハッチ

近年注目されて話題にのぼっているが、実用化しているカーフハッチを見るのは初めてであったが使用状況は良好であった。出生してから1カ月齢まで使用するが、カーフハッチで哺育した子牛は群飼になっても事故が少ないという話であった。



片岡牧場コリンズ方式（カウンタースロ
ープ・フィーディングフロア）肥育牛舎

以上の3つのデイリービーフの施設を見学し、片岡牧場で解散する時は、空はすっかり晴れあがり、ポカポカの小春日和となった。大平原に沈む夕日をながめながら札幌へ向い帰途についた。

デイリービーフ施設の経営概要

	池田町肥育センター	更別アシタカ農事有限会社	片岡牧場
設立年月日	昭和47～48	昭和45	昭和47(但しホルδは昭49～)
資本金	14,790千円	10,000千円	個人経営
家畜	ホルスタイン種δ 褐毛和種 アバーディン・アンガス種 褐毛和種×アバーディン・アンガス F1	ホルスタイン種δ ホルスタイン♀(育成一放牧地利用)	ホルスタイン種δ 黒毛和種
施設	スラテッドフロア式ルーズバーン肥育舎 348㎡×2	哺育舎 243.62㎡ 哺育育成舎 714.42㎡フリーストール 育成舎 324㎡×2 ルーズバーン 肥育舎A 730.35㎡ > コリンズ " B 568.35㎡ > 方式	哺育舎 64.8㎡ カーフハッチ 育成舎 207.36㎡×2 育成舎 336.6㎡(簡易改造) 肥育舎 763.68㎡コリンズ方式 患畜舎 106.92㎡
従事者	専従2名 臨時雇1名	3家族7名	3名
飼養管理	肥育(250～300kg以降)10ヶ月 (褐毛和種は繁殖一放牧育成一肥育一貫体系) 稲ワラ(農家より)・大麦圧片・配合	哺育一育成(素牛生産) 将来は肥育まで一貫 デントコーン・配合・乾草 サイレージ	哺育一育成一肥育 18ヶ月一貫 デントコーン・配合・乾草 サイレージ